

# 訪問看護ステーションやいた

矢板市末広 45 番地 3



管理者  
齋藤 康浩 様  
利用保険割合  
医療保険…3割  
介護保険…7割

コロナ禍での療養先の選び方は、これまで以上に「その人の大切なこと」を丁寧に取り扱う姿勢が求められます。訪問看護師は、人生の最終段階を迎える患者さんにとって、希望をかなえる大切なパートナーの1人だと思えました。(記者より)

## 施設のアピール

訪問看護ステーションやいたは、尾形クリニックに併設されたステーションです。矢板市を拠点にまぐら市・塩谷町などで支援活動を行っています。その他の地域でもご相談があれば、「縁」を大切に、できるだけ対応したいと思います。

スタッフは、管理者も含め看護師3名で、「ひとりひとりの患者さんやそのご家族の人生に関わらせてもらう」という姿勢で、小規模事業所ならではの支援、患者さんご家族の顔が見える関係を大切にしています。



優しさと熱意にあふれる管理者の齋藤さん

## 連携している主な医療機関

尾形クリニック、那須赤十字病院、国際医療福祉大学病院、国際医療福祉大学塩谷病院、済生会宇都宮病院、佐藤クリニック、阿部内科、佐藤病院、かわしま循環器内科、上田医院など、矢板近郊を中心に県北・県央地区と広範囲にわたる医療機関と連携を図っています。最近「こ」でも連絡帳も使い始めたので、より円滑な連携につなげていきたいと思っています。

## 施設の役割や特徴について

〜笑顔のために「考動」する〜

在宅療養されている方は、様々な不安や負担を抱えています。その不安や負担を少しでも軽くするため、私たちは「考動」することを心がけています。「考動」(こうどう)とは、自ら考えた上で行動する、という造語です。私たちは、利用者、家族だけでなく支援者も含めて、皆さんが笑顔になることを目指し、一緒に考え「考動」することが重要だと考えています。



アットホームなステーションには、スタッフの分身(!?)のペンギンがいました。

## 心に残った患者さんとのエピソード

〜ターミナル期の患者さんへの支援〜

最近の病院や施設では、新型コロナウイルス感染症等の対策として、面会制限をせざるを得ない状況です。院内感染対策は大切なことですが、残された時間が限られているターミナル期の患者さんやご家族にとっては、悩ましいところだと思います。そんな患者さんやご家族さんから、「できるだけ一緒に過ごしたい。でもこんな状態で自宅に帰れるのかな。」と相談を受けることもあります。そんなとき、私たち訪問看護師は、できるだけ患者さんご家族のご希望に沿った在宅療養ができるようサポートしています。

最初は主治医から、慢性腎不全のターミナルの患者さんがそれまで続けていた透析をやめて自宅で看取りをする方針ということで、支援依頼がありました。私たち支援者は「せっかくだから好きなことをして過ごして欲しい。」と考え、「ご本人の希望をみながら支えることになりました。」

その患者さんは大のハワイ好き。ハワイアンミュージックを流し、アロハシャツを着て過ごしました。カラオケが大好きなご本人を囲んでみんなでカラオケ大会をして、好きなことをして過ごせたからか、とても表情は明る

## ケアマネジャーとの連携で

思うこと

ケアマネジャーさんの中には責任感からか、他の支援者の話に耳を傾けず、1人で抱え込んでしまう方もいます。支援するチームとして、担当者会議で会うだけでなく、気軽に連絡を取れる間柄、支援の話以外にもちょっとした世間話ができるような関係ができれば、連携も取りやすくなると思います。私たちもそんなコミュニケーションを大切にしながらチームで関わることを大切にしていきたいと思っています。



訪問する車はロゴマークが入っています。街で見かけるかもしれませんね。